

マスターズを彩るレジェンドたち(35)

田植え時の6月は梅雨の季節のイメージだが、各地では大会が行われている。同月は15日に関東(熊谷)、22日には近畿(奈良)、四国(徳島)、28日は東海(長野)各選手権大会などがそうだ。会員の皆さんのなかには地元の大会だけでなく、足を延ばして“他流試合”を試みる人もいるだろう。そこで今月号には7～9月の各大会の日程を添えた。利用したい人の参考になればと。レジェンドは沖縄の田島清さん。

マスターズのマルチ人間 田島清さん(86歳・沖縄)

7月が来れば87歳になる沖縄の田島清さんが、2024年7月13日の誕生日に自著を出した。『闘って、人生を得よ!』(1700円、文芸社)がタイトル。帯に「子どもたちの無限に広がる未来を信じて」、「昭和の『荒れる』学校での悪戦苦闘の体験記」とあるように、荒廃した学校の教師として田島さんが生徒と向かい合った日々の苦闘ぶりを365ページにわたって、つづった物語だ。全国の先生たちにとって参考になりそう。

田島さんは高校、中学校の教師を長年勤めた。その傍らマスターズ陸上に打ち込んできた。生まれは沖縄県糸満市。糸満高から明大へ。が、この間、陸上部には所属していない。むしろ自由奔放に学び、活動したようだ。

ご自身の話では「小1から走っていた、小5では朝から芋掘りをしていた」そうだ。大学卒業後は沖縄ヤクルトに入社し、1年後に沖縄県内で教職に就いた。著書の人物紹介によると、中央高に理科、化学担当として18年間。

その後、与勝二中、北中越中、寄宮中に5年ずつ勤務したうち、寄宮中では専任生徒指導主任を4年勤めた。

続いて、小禄高、石川中、浦添中、児童センターと計10年余り勤め上げた。いずれにしても学校生活に携わった年数は長い。「スポーツや部活動、学校行事は35年間、一度も欠かさずに参加した」と語る。余暇での趣味が陸上なのだ。

まだ、マスターズ陸上がお目見えしていない時代、37歳の頃に沖縄県民体育大会で活躍している。「本格的に練習もしないで10数回、勝てたかな」とのこと。特にジャンプ力を生かした走高跳や走幅跳、三段跳で輝いた。

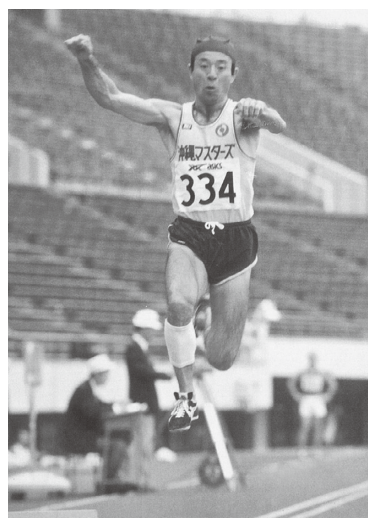
ここで閑話休題。田島さんはユーモアがあって、負けず嫌いな性格だ。あるとき、生徒に「先生は棒高跳を跳んだことは」と聞かれ、「いやない」と言ってしまうよかったのに、持ち前の「負けず嫌い」がムラムラと。田島さんが「2m50ぐらいわな」と言うと、生徒たちは「手本を示せ」と迫る。

棒高跳といえば田島さんが中学生時代に遊び心で試みただけ。45歳になったそのときでも、100m11秒5、走幅跳6m30ほどの力はあるが、棒高跳は素人だ。だが、ここで引き下がるわけにはいかない。覚悟を決めた田島さんはその2年前に聞いた、マスターズ世界記録保持者の森田真積さんの教えを思い出した。

それは「第一はスピード。棒を体の中心に持ってくる。ボックスに棒が入れば跳べるはず」。何度もイメージトレーニングした田島さんは、思い切ってスタートを切った。イメージどおりに身体を振り上げると、ズボンの裂ける音を残して、バーを越えた。成功だ。全校生徒は大喝采を送った。

以上のようなひとコマが『闘って、人生を得よ!』の文中に出てくる。

では田島さんとマスターズ陸上との出会いはというと、1980年までさかのぼる。陸上に凝っていた田島さんが不惑(40歳)を迎えたとき、「おやっ？」



1982年、東京・国立競技場で開催された第3回全日本マスターズでの田島さんの勇姿(写真提供/田島清さん)

と目を留めたのが、80年10月18、19日にマスターズ陸上発祥の地・和歌山で第1回全日本マスターズが開催されることを報じた『陸上競技マガジン』の記事だった。

沖縄県民体育大会の走幅跳を6m41で制した田島さんの血が騒いだ。「よーし、行ってみよう」と沖縄からただ一人参加した。他流試合は「緊張した」そうだが、40～44歳の部の走高跳1m50、走幅跳6m37で1位。三段跳は「マスターズ連合理事長の鴻池清司さんにやられた」で11m90の2位となった。

当時、田島さんは42歳。初参加の感想を「男子の場合、40歳以上が参加でき(当時)、5歳刻みで競い合うとは面白い。興味がある」と述べた。

翌年の81年1月にニュージーランドのクライストチャーチで第4回世界

マスターズがあり、田島さんも海を渡った。同大会には44カ国から約2500人が参加。田島さんはM40クラスの走高跳1m50の5位。走幅跳6m13で3位、三段跳12m25が2位の成績だった。

田島さんは「とにかく時間どおりに競技が始まらず、走幅跳などは1時間遅れで始まるなどで散々。走幅跳では優勝を目指していたのに」と残念がった。半面、うれしいこともあった。それはマスターズ連合会長だけでなく、陸上界の至宝・織田幹雄さんに目を留められ、褒められたことだ。

これを機に決意したのは「沖縄にもマスターズ陸上を旗揚げすべき」である。田島さんの奔走が始まった。マスメディアでの紹介もあって、当初は賛成者が多く、すぐまとまりそうな成り行きだった。雲行きが怪しくなることもあったなか、田島さんの熱意が実って、81年3月7日に沖縄マスターズ陸上連盟が結成された。

8月には台風接近の情報があるなか、第1回沖縄マスターズ陸上を開催し、マスターズ日本新6、同タイ記録1が出て盛り上がった。田島さんは「最初が肝心。第1回大会が成功すれば、後は軌道に乗る」と、行政関連はかへの交渉などに奮闘して、大会開催にこぎ着けた。

ここまでくるとマスターズ陸上に関心を持つ人も増え、81年10月に山梨であった第2回全日本マスターズ陸上へは、沖縄から35人が参加。男子だけで9つのタイトルを取り、43歳の田島さんは走幅跳は5位だったが、三段跳12m26で1位、第1回大会の悔しさを晴らした。

山梨大会から3年後の84年、全日本マスターズの第5回記念大会を沖縄に誘致した。が、当初は開催に賛成していた人たちが反対したりと、もめごとがあって大変だった。それでも最後は田島さんが押し切る形で開催にこぎ着けた。

大会は「もてなしの心」を前面に出し、期間中に闘牛や沖縄の伝統的な盆

踊りであるエイサーを催すなどして、参加者に喜ばれた。特に珍しかったのはエイサーでの指笛だ。

田島さんは今でも沖縄のマスターズ大会には必ず参加している。これまでに100mH、走幅跳、五種競技、十種競技などで日本記録を樹立しているが、「記録も大切だが、競技の良さ、楽しさが子供たちに伝わればいい」が持論だ。



田島さんは沖縄マスターズ陸上の連盟を発足させ、理事長、副会長を歴任した後、役職からは引き、現在は一会員としてマスターズ陸上を楽しんでいる。86歳にして立走幅跳3m30台を目指す。長男と長女の二人の子を持つ

好好爺の田島さん。奥様の協力を得て書き上げた著作の中に出てくる中学・高校での教え子たちが、社会人になって社長になったり、社会に貢献している姿を喜ぶ。現在、浦添市に在住。



マスターズ陸上関連大会日程(7月～9月分)

7月	
6	京都マスターズ/たけびしスタジアムほか
12	山梨マスターズ/甲府・緑が丘
13	県民スポーツ祭/福井・9.98スタジアム
21	北海道マスターズ札幌記録会/厚別公園補助競技場
21	東京マスターズトラック記録会/八王子上柚木
26	北海道マスターズ記録会/旭川・花咲公園
26～27	石川マスターズ混成/西部緑地公園
8月	
2	長崎マスターズ/トランスコスモスタジアム長崎
3	北海道マスターズ/岩見沢・東山公園
9	T・F MASTERS NIGHT GAMES in SAITAMA/熊谷スポーツ文化公園
10	岩手マスターズ関記録会/一関市運動公園
10	名張市陸上兼名張マスターズ/三重・メイハンフィールド
24	福井マスターズ/9.98スタジアム
24	愛媛マスターズ/県総合運動公園
9月	
6～7	中国マスターズ/鳥根・浜山公園
7	熊本マスターズ/熊本市水前寺
7	滋賀県スポレク祭マスターズ/東近江市総合運動公園布引
7	中国マスターズ混成(五種)兼中国マスターズ記録会/岡山・倉敷運動公園
13	山梨マスターズ記録会/甲府市緑ヶ丘
13	みえスポーツフェスティバル・三重県スポレクマスターズ/三重交通Gスポーツの杜伊勢
14	兵庫マスターズ/神戸ユニバー
14	秋田マスターズ秋季大会/能代市
14	北海道マスターズ投てき及び跳躍競技大会/帯広の森
14	北陸マスターズ/新潟・十日町市
14	埼玉マスターズ/熊谷スポーツ文化公園
14	鹿児島マスターズ記録会・室内競技大会/ジャパンアスリートトレーニングセンター大隅
15	静岡マスターズ/草薙総合運動場
15	大分マスターズ/大分市営
15	高知マスターズ/春野総合運動公園
21	奈良マスターズ兼県スポレクマスターズ/ロートフィールド奈良
21	広島マスターズ記録会/庄原市上野総合運動公園
21	東北マスターズ/新青森県総合運動公園
23	大阪マスターズ/ヤンマーフィールド長居

※左の数字は開催日